

意味空間と述定

正田 備也

2020年8月16日

意味論的空間 semantic space

- 意味論的空間semantic spaceは、個体individualの集合である。
- 意味論的空間に属する個体のあいだには、同値関係 equivalence relationを定義することができる。
- 同値関係は、個体に関する無関心indifferenceである。
- 個体に関する無関心は、様々でありうる。
- 個物particularは、意味空間を同値関係によって分割して得られる同値類である。
- 同値関係とは、フレーゲのSinnのことである。

無関心 indifference

- ここでいう無関心は、Hareのuniversalizabilityと密接な関係にある概念である
- つまり、ここでいう無関心は、個体を普遍へと関係付けることを可能にするという意味でのuniversalizabilityである
- universalizeすることが、すなわち、意味することである

述語 predicate

- 述語は、意味空間から真偽値への関数と、その意味空間における特定の同値関係との、組である。前者を述語の命題関数と呼び、後者を述語の同値関係と呼ぶ。
- 述語は、述語の同値関係によって意味空間を分割して得られる同値類である個物に適用される。
- 述語は個体に適用されるのではない。
- 述語を個物に適用することを述定と呼ぶ。
- 述定によって得られるものを命題と呼ぶ。
- 同値関係なしに述定がなされることはない。
- 命題は、真であるか偽であるかの、いずれかである。

命題関数と同値関係の組としての述語

- 述語の同値関係のもとで同値となる2つの個体は、述語の命題関数によって、ともに真値へと写像されるか、ともに偽値へと写像されるかの、いずれかである。命題関数と同値関係とは、このような仕方で述語において組にされている。
- 述定によって得られる命題を真とする個物とは、フレーゲの *Bedeutung* のことである。

意味 Bedeutung

- 述定によって得られる命題が真になったり偽になったりするの
は、述語が異なる個物に適用されるからである。
- つまり、命題の真偽は述語の意味によって決まる。
- 金星は個物である。明けの明星や宵の明星も個物である。
- 明けの明星に適用されることで真なる命題をもたらす述語は、
金星に適用されることで真なる命題をもたらす。宵の明星につ
いても同様である。
- 明けの明星に適用されることで真なる命題をもたらす述語が、
宵の明星に適用されることで真なる命題をもたらすとは限らな
い。逆の場合も同様である。

意義 Sinn

- 金星は、意味空間を同値関係によって分割して得られる同値類のうちのひとつである。そして、明けの明星と宵の明星はいずれも、この同値関係より細かい同値関係によって意味空間を分割して得られる同値類のうち、金星に対応する同値類の部分集合であるもののうちのひとつである。
- Sinnが違うとは、同値関係が違うことである。

述語の定義域

- 述語は、個体ではなく、個物に適用される。
- よって、述語の定義域は、意味空間ではない。
- 述語の定義域は、述語の同値関係によって意味空間を分割して得られる同値類の集合である。
- 述定によって得られる命題の真偽に関わっている限り、個物が個体の集合であることには無関心なままである。この無関心は、述語の同値関係のことである。
- 述語の定義域は意味空間ではないが、述語の命題関数の定義域は、すでに述べたとおり、意味空間である。

主張 assertion (1)

- 述語を個物に適用するだけでなく、同時に個体を指示indicateするとき、述定は主張assertionとなる。
- 主張によって指示される個体が、述語の適用される個物に属する個体であり、かつ、この述定によって得られる命題が真であるとき、この主張は命題が真だと主張している。
- 主張によって指示される個体が、述語の適用される個物に属する個体であり、かつ、この述定によって得られる命題が偽であるとき、この主張は命題が偽だと主張している。
- 主張は個体を指示するが、述語が適用される個物に属する個体のなかから選んで指示することはない。

主張 assertion (2)

- 主張によって指示される個体が、述語の適用される個物に属さない個体であり、かつ、この述定によって得られる命題が真であるとき、この主張は命題が真ではないと主張している。
- 主張によって指示される個体が、述語の適用される個物に属さない個体であり、かつ、この述定によって得られる命題が偽であるとき、この主張は命題が偽ではないと主張している。
- いずれにしても、主張は、述語を個物に適用するだけでなく、同時に個体を指示している。

対話 dialogue

- 対話dialogueは、主張の共起cooccurrence of assertionsである。

対話における合理性 rationality in dialogue

- 個物に述語を適用することで得られる命題が真であるとする。
- このとき誰かが、その命題は真ではないと主張assertしたとする。（「そうではない。よく見ろ！」）
- この誰かの主張を受け入れることを可能とする合理性を、対話における合理性rationality in dialogueと呼ぶ。
- 対話における合理性は、述語の同値関係を変更することで、その誰かの主張を受け入れることを可能とする。
- 述語の同値関係の変更は、その誰かの主張によって指示されている個体が述語の適用された個物に属するようにすることを可能とする。

表象

- 個物は個体の表象representationである
- 述定が個体を個物へともたらす
- 対話において、主張は幸福をもたらすか、不幸をもたらすかのいずれかである
- 一方の主張が他方の主張をaffirmsするとき、後者の主張は幸福へと通じる
- 一方の主張が他方の主張をdenyするとき、後者の主張は不幸へと通じる
- 対話が述定を主張へともたらす

対話の過程

- 対話の過程とは、主張がどの個体を指示しているかを探り合う過程である。
- 述定は述語を個物に適用することであり、個体に適用することではない。
- 主張の共起は、命題を真だと主張する主張と同じ命題を偽だと主張する主張との共起でありうる。
- このような共起において、主張が指示している個体への関心が生じる。
- 主張が指示している個体への関心が生じることとは、述語が適用される個物を同値類として与える同値関係の無関心から離れることである。

直示 deixis

- 対話の過程で、直示によって個体の特定が果たされたかのように思われることがある。（「私が言っているのは、このことである。」）
- しかし、その際に果たされているのは、真だとする主張と偽だとする主張がどちらかへと道を譲ることを可能とする同値類を得るための同値関係の取得である。
- 個体は、対話を導きはするが、対話の目的地を与えはしない。

命題は真であるか偽であるかのいずれかである

- 命題は真であるか偽であるかのいずれかである。
- 命題が真であると主張する主張と、同じ命題が偽であると主張する主張とが、共起することはいりうる。これは、命題が真であったり偽であったりすることではない。
- 命題は共起しない。主張が共起する。
- 命題は、論理的なつながり以外のつながりによって、同じ系のなかに置かれることはない。
- 共起は論理的なつながりではない。また、論理に反するつながりでもない。偶然的accidentalなつながりである。